

周手術期看護学実習における手術室実習の 満足度を高める要因

—実習状況および手術室看護師・教員の指導との関連—

小島さやか¹⁾ 小林 祐子¹⁾ 帆苅真由美¹⁾

小林 理恵¹⁾ 清水 理恵¹⁾

1) 新潟青陵大学看護学部看護学科

Factors increasing nursing students' satisfaction with practical training in the perioperative period, with a focus on the relationship between training situations and the guidance of perioperative nurses and teachers

Sayaka Kojima¹⁾ Yuko Kobayashi¹⁾ Mayumi Hokari¹⁾

Rie Kobayashi¹⁾ Rie Shimizu¹⁾

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY FACULTY OF NURSING DEPARTMENT OF NURSING

要旨

看護学生の手術室実習における実習満足度とその影響要因を明らかにすることを目的とし、手術室実習を行った看護学生83名に無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は実習状況、実習満足度のほか、実習および指導体制への評価とした。手術室実習が看護学生の学びに与える影響を分析した結果、実習状況別では手術終了まで見学した学生は興味が有意に高く、切開手術群は鏡視下手術群に比して手術室看護師の指導への評価が有意に高かった。手術室実習満足度には手術見学による学びの深まり、教員の指導、手術中の看護師の指導が影響していることが明らかになった。

手術室実習の満足度を高めるためには、教員と看護師による継続的な手術看護教育が求められる。術前は事前学習により実習準備状態を高める工夫を行い、術中は手術の進行状況や看護師の役割を随時伝えることや看護実践の経験により手術看護の理解を深めることが満足度の向上につながる。

キーワード

手術室実習、周手術期看護教育、実習満足度、看護学生、手術室看護師

Abstract

To clarify the levels of satisfaction of nursing students with perioperative practical training and the factors influencing these levels, we conducted an anonymous self-questionnaire survey of 83 nursing students who had participated in perioperative practical training. The survey included questions about training situations, levels of satisfaction with the training, and evaluation of the training and teaching system. Analysis of the impacts of the perioperative practical training on the students' learning showed that students who had observed the surgery through to completion showed significantly greater interest in operating room nursing, and that nurses' guidance in open surgery was evaluated significantly more highly than their guidance in endoscopic surgery. Deepening of learning by observing surgery, receiving teachers' guidance, and receiving guidance from nurses during surgery affected the students' levels of satisfaction with perioperative practical training.

To increase these levels of satisfaction, continuing surgical nursing education by teachers and nurses is needed. Before surgery, we need to improve students' preparation for training by prior learning; during surgery, we need to tell students the progress of the ongoing surgery and the roles of nurses as needed. In addition, practical experience in nursing skills enables students to deepen their understanding of surgical nursing. These factors will increase the satisfaction levels of nursing students.

Key words

Perioperative practical training, perioperative nursing education, satisfaction of training, nursing student, perioperative nurses

はじめに

手術室実習においては、幅広い年代、多様な生活背景、様々な疾患を持つ患者を、限られた時間のなかで理解し、必要な援助を行うことが求められる。看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（2011）では、看護学生の看護実践の分析力・統合力修得のための効果的な臨地実習の方法として、学生が実際に体験する機会を多くすることが重要¹⁾とされており、手術室実習においても、手術室に実際に入り術中看護に参加することが看護師の役割・機能・業務を学ぶ²⁾ために有効である。看護系大学への調査では手術室実習を実施する大学は80%以上³⁾との報告もある。しかし周手術期においては患者の変化は著しく学習内容が多岐にわたる上、多くの看護学生にとって手術室への入室は未知の経験であり強い緊張や不安を伴う⁴⁾とも言われており、手術看護への理解を深めるには支援が必要である。

教育効果を上げる臨地実習のあり方として、教員と実習指導者の連携、学習状況の情報共有が重要¹⁾とも言われている。実習指導において、手術室看護師が臨床経験から培われた看護実践を伝えることや、学生の希望も踏まえ学生自身が実践できるよう配慮することは、座学での学習と臨床の学びを統合する²⁾ことに役立つ。また、教員には、既習の知識と実習の学びを繋げ、統合的に理解するための支援や臨床指導者からの助言を適時に受けられるよう⁵⁾環境を調整する役割がある。このように手術室看護師と教員、双方が協力し実習指導体制を整えることが求められる。

手術看護教育に関して先行文献を概観すると、手術室実習中の学生の学びや心理状態を明らかにすることを目的とした調査は多く行われている⁶⁾ものの、学生の主観的評価である実習満足度という視点で手術看護教育について述べているものは少ない。一方で臨地

実習における学生の実習満足度に影響を与える要因は、援助を通して患者への関心・理解を深める体験をすることや、学習目標とする援助を受け持ち患者に実施できること⁷⁾であり、実習指導体制も大きく影響する⁸⁾ことが明らかにされている。

このことから、手術室実習において学生の手術室実習満足度を調査することは、教員側からの評価にとどまらず、学生の視点から実習内容および実習指導が効果的であったかを評価することができるため、手術看護教育を考える上で重要である。そこで、手術看護教育の効果的な内容や方法、指導のありかたを検討するために看護学生の手術室実習満足度に着目し、調査を実施した。

I 目的

本研究は、手術室実習において看護学生の手術室実習満足度に実習状況や看護師および教員の指導が及ぼす影響を明らかにし、手術看護教育への示唆を得ることを目的とする。

II 方法

1. 対象と調査方法

手術室実習（以下、実習）を行ったA大学3年次看護学生（以下、学生）83名を対象とし、自記式無記名質問紙調査を行った。調査期間は平成27年4月～7月で、それぞれの学生の実習の履修時期に合わせて実施した。対象者には、周手術期看護学実習（2週間）の最終日に実習担当教員が調査の概要と目的、方法を文書及び口頭で説明し、調査用紙を配布した。回収は、学内の一か所に回収箱を設置し学生が自由に投函できるよう配慮した。調査用紙は無記名とし、調査用紙とともに配布した封筒に入れて投函するよう依頼した。

2. 調査内容

性別、実習状況（手術室実習の対象患者の

術式、受け持ち患者か否か、手術中の看護実践経験の有無、手術見学時間)について尋ねた。手術室実習への評価として、手術室実習の満足度、実習後の学びの深まりの自覚、手術室看護への興味を5件法で測定し得点化した。指導に関する満足度として、教員および看護師の指導(3項目)について5件法で測定し得点化した。手術室実習に関して困った経験の有無と内容(11項目、複数回答)、手術室実習への思い(自由記述)を尋ねた。

3. 分析方法

実習状況と、学生の手術室実習への評価との関連をt検定で求めた。実習満足度と変数間の関連性をSpearmanの順位相関分析で検討したうえで、実習満足度への影響要因を重回帰分析を用いて分析した。p<.05を有意差ありとした。

4. 倫理的配慮

対象者に研究の趣旨や方法、研究協力の任意性及び中断の自由、分析および結果の公表について文書と口頭で説明した。調査に際しては、調査への同意の有無および回答内容は実習評価に影響しないこと、個人の特定に繋がらないこと、学術的な目的以外では使用しないことを説明した上で、同意の得られた学生にのみ回答を依頼した。対象者による調査用紙の投函を以て研究協力の同意を得たものとした。

5. 手術室実習の概要

A大学3年次生における手術室実習は、以下の内容、方法で実施している。

1) 実習目標、内容、対象患者

実習目標は手術に伴う対象者の身体機能、心理的状況を理解し、手術室における看護の実際を学ぶこととしている。内容は、手術を受ける患者の身体面、心理面の理解、手術中・直後に患者が受ける処置と看護の理解、手術室の環境の理解を中心に学ぶ。

実習日は、3年次前期の領域別実習における周手術期看護学実習期間中の受け持ち患者

の手術日であり、B市内の実習施設(4ヶ所)の手術室で行っている。見学対象患者は、原則として周手術期看護学実習の受け持ち患者であるが、実習スケジュールの都合等で受け持ち患者の手術見学が困難な場合は、他の患者の手術を見学することがある。見学対象の手術は全例が全身麻酔下による手術であり、診療科別の内訳は、消化器系(胃、肝、胆、膵、大腸)約7割、呼吸器系・循環器系・頭頸部外科が各1割ずつを占める。

2) 実習方法

- (1) 実習前;実習目的や方法、内容について教員から説明した後、手術室看護師から手術室内でオリエンテーションを受け、手術室の構造・設備を見学する。学生が実習について適切に計画、実施できるよう、教員が個別に指導を行う。その後、学生は実習当日までに実習記録に自らの学習目的・目標を記述する。実習対象患者の術式や教員および看護師からの説明を参考に目標を考え、術中に観察すべき項目や行いたい看護等を記述する。
- (2) 実習当日;学生は対象患者の手術に合わせて手術室に行き、指導担当となる外回り看護師に学習目的・目標を伝える。原則として教員は同行せず、患者の手術室入室から帰室まで、外回り看護師の指導のもとに手術見学を行う。
- (3) 実習終了後;学生は実習で得た学びを自身の目標に沿って記述し、実習記録を提出する。実習指導を担当した外回り看護師が助言を記入して学生へ返却する。

III 結果

1. 対象者の概要

質問紙は83部配布し、回収数は80部(回収率96.4%)であった。そのうち有効回答79部(有効回答率98.8%)を分析対象とした。性別は男性9名(11.4%)、女性70名(88.6%)であった(表1)。

表1 対象者の概要と手術室実習の状況 (n=79)

項目	内訳	人数	(%)
属性	男性	9	(11.4)
	女性	70	(88.6)
術式	切開手術(開腹・開胸等)	49	(62.0)
	鏡視下手術	30	(38.0)
対象患者	受け持ち患者	69	(87.3)
	受け持ち患者以外	10	(12.7)
看護実践経験	経験した	38	(48.1)
	出血量測定	34	
	尿量測定	23	
	体位固定の介助	15	
	バイタルサイン測定	6	
	ガウン着用の介助	1	
	消毒剤の拭き取り	1	
	経験しなかった	41	(51.9)
手術見学時間	終了まで見学した	62	(78.5)
	途中退室した	17	(21.5)

注) 看護実践経験の項目は複数回答

1) 実習状況

実習対象患者の術式は、開腹や開胸などの切開手術が49名(62.0%)、腹腔鏡や胸腔鏡などの鏡視下手術が30名(38.0%)であった。周手術期看護学実習の受け持ち患者の手術であった者は69名(87.3%)、受け持ち以外の

患者が10名(12.7%)であった。手術見学時間については、手術終了まで見学した者は62名(78.4%)、実習日程や手術時間の都合、手術見学中の自身の体調不良等により途中で退室した者が17名(21.5%)であった。

2) 手術中に経験した看護技術

手術室実習中に、看護の実践経験があった者は38名(48.1%)、経験がなかった者は41名(51.9%)であった。経験の内容(複数回答)は、出血量測定(34名)、尿量測定(23名)、体位固定の介助(15名)、バイタルサイン測定(6名)、ガウン着用の介助(1名)、消毒液の拭き取り(1名)であった。

2. 手術室実習への評価および実習状況が評価に与える影響

手術室実習への評価を尋ねたところ、「手術見学に満足している(以下、手術室実習満足度)」にそう思うと答えた者は62名(78.4%)、「見学して学びが深まった(以下、学びの深まり)」に対し、そう思うと答えた者は65名(82.3%)、「手術看護に興味がある(以下、手術看護への興味)」にそう思うと答えた者は28名(35.4%)であった(表2)。

表2 手術室実習に対する学生の評価 (n=79)

項目	人数 (%)	そう思う	ややそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない
手術室実習への評価	手術見学に満足している	62 (78.4)	16 (20.3)	1 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
	見学して学びが深まった	65 (82.3)	14 (17.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	手術室看護に興味がある	28 (35.4)	29 (36.7)	10 (12.7)	11 (13.9)	1 (1.3)
実習指導体制への評価	教員の指導は適切だった	45 (57.0)	20 (25.3)	12 (15.2)	2 (2.5)	0 (0.0)
	看護師の術前オリエンテーションは役立った	53 (67.1)	24 (30.3)	1 (1.3)	1 (1.3)	0 (0.0)
	手術中の看護師の指導は適切だった	65 (82.3)	12 (15.1)	1 (1.3)	1 (1.3)	0 (0.0)

実習状況が手術室実習の評価に与える影響を分析したところ、手術終了まで見学できた者は手術看護への興味において有意に高い得点を示していた ($t(77)=3.08, p<.01$)。手術見学時間の違いによって実習満足度や学びの深まりに有意差はみられなかった (表3)。

また、実習対象患者の術式および周手術期看護学実習の受け持ち患者か否か、また手術中の看護実践経験の有無との関連を分析したが、有意差は認められなかった。

3. 実習指導に対する学生の評価

手術室実習に関して、「術前の手術室看護師によるオリエンテーションが役立った (以下、術前オリエンテーション)」にそう思うと回答した者は53名 (67.1%)、「手術中の看

護師の指導が適切だった (以下、手術中の看護師の指導)」にそう思うと回答した者は65名 (82.3%)、「教員の指導は適切だった (以下、教員の指導)」にそう思うと回答した者は45名 (57.0%) であった (表2)。

実習状況が指導への評価に及ぼす影響を検討するために、指導の下位尺度についてt検定を行った結果、手術中の看護師の指導への評価において、患者の術式は切開手術のほうが鏡視下手術よりも有意に高い得点を示していた ($t(35.43)=-2.14, p<.05$)。教員の指導ならびに看護師の術前オリエンテーションに対する評価には有意差がみられなかった (表4)。

表3 手術見学時間の違いによる手術室実習への評価 (n=79)

項目	最後まで見学(n=62)	途中退室(n=17)	t 値
	M	M	
手術室実習満足度	4.82	4.59	1.74
学びの深まり	4.85	4.71	1.22
手術室看護への興味	4.10	3.24	3.08 **

t 検定 ** p < .01

表4 術式の違いによる実習指導に対する評価 (n=79)

項目	切開手術(n=49)	鏡視下手術(n=30)	t 値
	M	M	
教員の指導	4.37	4.37	0.00
看護師の術前オリエンテーション	4.65	4.60	-0.39
手術中の看護師の指導	4.90	4.60	-2.14 *

t 検定 * p < .05

また、手術室実習対象患者の見学時間、周手術期看護学実習の受け持ち患者か否か、また実習中の看護実践経験の有無による実習指導に対する評価についても分析したが、有意差は認められなかった。

4. 手術室実習で困った経験の有無と内容

手術室実習において困った経験があった者は36名 (45.6%)、なかった者が43名 (54.4%) であった。困った経験の内容 (複数回答) としては手術見学前の事前学習 (10名)、見学

前日の睡眠時間の確保 (3名)、受け持ち患者との関係 (2名)、手術室看護師の指導 (1名)、手術室での自分の動き (13名)、手術見学中の体調不良 (1名)、手術見学中の休憩の取り方 (2名)、手術終了まで見学できなかったこと (8名)、術後の観察 (11名)、手術後の看護計画の立案 (6名) であった。担当教員の指導と病棟看護師の指導については、困ったとした者はいなかった。

困った経験の有無による実習満足度への影

響ならびに実習指導への評価をt検定で分析したが、有意差は認められなかった。

5. 手術室実習満足度と学習状況および指導との関連

手術室実習満足度に与える要因を明らかにするために、実習満足度と実習状況ならびに指導への評価について相関係数を求めたところ、手術室実習満足度と学びの深まり ($r = .314, p < .01$)、手術室看護師の指導 ($r = .421, p < .01$)、教員の指導 ($r = .285, p < .05$) の間に有意な相関がみられた。実習状況の下位尺度との相関関係はみられなかった (表5)。

続いて、満足度への影響要因を重回帰モデルで分析した。その結果、手術中の看護師の

指導 ($\beta = .405, p < .01$)、教員の指導 ($\beta = .230, p < .05$)、学びの深まり ($\beta = .228, p < .05$) が影響していた。次に患者の術式および手術中の看護実践経験別に分析を行ったところ、外回り看護師とともに看護実践経験をした学生においては手術中の看護師の指導 ($\beta = .734, p < .01$) および学びの深まり ($\beta = .417, p < .05$) が影響していた。また切開手術群では、満足度は学びの深まり ($\beta = .343, p < .01$) および教員指導 ($\beta = .322, p < .01$) との関連が認められた。最後まで手術見学できた群においては手術中の看護師の指導 ($\beta = .496, p < .01$) および教員の指導 ($\beta = .244, p < .05$) との関連が認められた (表6)。

表5 手術室実習満足度との相関 (n=79)

項目	手術室実習満足度	学びの深まり	手術室看護への興味	教員の指導	看護師の術前オリエンテーション	手術中の看護師の指導
手術実習満足度	—	.314 **	.182	.285 *	.034	.421 **
学びの深まり		—	.161	.178	.043	-.032
手術室看護への興味			—	.112	.060	.047
教員の指導				—	.118	.084
術前オリエンテーション					—	.021
手術中の看護師の指導						—

Spearmanの順位相関分析 * $p < .05$, ** $p < .01$

表6 手術室実習の満足度に影響を与える要因 (n=79)

説明変数	全体	手術中の看護実践経験		実習対象患者の術式		手術見学時間	
	β	経験なし β	経験あり β	切開手術 β	鏡視下手術 β	途中退室 β	最後まで見学 β
学びの深まり	.228*	.154	.417*	.343**	.132	.922**	.093
手術室看護への興味	.095	.080	-.054	.169	.049	-.031	.095
教員の指導	.230*	.404**	-.040	.322**	.174	.040	.244*
術前オリエンテーション	-.011	.026	.141	-.018	.047	.159	.019
手術中の看護師の指導	.405**	.404**	.734**	.180	.442	-.374	.496**
R ²	.347**	.426**	.447**	.506**	.278	.771**	.329**

基準変数：手術室実習満足度 * $p < .05$, ** $p < .01$

6. 自由記述内容からみた手術室実習での学びの内容

手術室実習についての自由記述内容からは、手術室看護師への役割の気付き（「手術看護は常に先を見据えて行わなくてはいけない」「患者の気持ちや不安をきちんと考えている」）、自身の手術室イメージの変化（「思っていたほど重々しく緊迫している雰囲気ではなかった」「音楽が流れたりしてリラックスできる雰囲気だった」）、多職種連携の重要性への気付き（「チームで連携し声を掛け合うことが大切」「各職種が自分の役割に責任を持つことが重要」）、清潔で安全な手術室環境保持の必要性の再認識（「清潔・不潔の区分けが徹底されていた」「患者の安全安楽が守られている」）などの意見がみられた。

IV 考察

1. 実習状況別にみた看護学生の手術室実習への評価

手術室実習は、周手術期看護を学ぶ上で欠かせない手術を受ける患者の理解や、手術中、手術直後の看護の理解、また手術室の環境や各職種の役割、連携を学ぶ重要な場となっている。今回の調査では実習に対する満足感および実習による学びの深まりを感じている学生の割合は高く、また実習満足度には実習状況や看護師・教員の指導が深く関連していることが明らかになった。

実習状況別の分析では、手術終了まで見学できた学生の興味は有意に高かった。その要因として、患者の手術室入室から病棟への帰宅までの一連の流れを見学することで手術室看護師の動きや役割を知り、達成感を感じられたのではないかと考えられる。手術室実習の達成感には学生の実習時間の長さに関連する⁹⁾ことから、手術室実習においては、可能な限り手術室入室から帰宅までを継続して見学できるように教員と看護師間で調整して

対象患者を選定することが必要である。また、学生の体調不良による見学中止を回避できるよう、体調管理についての指導も重要である。

術式別の分析において、切開群が鏡視下手術群に比較して看護師の指導に対し肯定的な評価を示した背景には、鏡視下手術が直接術野を確認できないことなどから、手術を初めて見学する学生には理解が難しかったことが推測される。鏡視下手術においては、拡大鏡で術野の映像を認知するのは初学者には難しく、内視鏡の操作により臓器を捉える角度や方向が変わることで映像上において解剖図の理解を困難にしている¹⁰⁾ことが報告されている。また学生の実習満足度は受け持ち患者の疾患が理解しやすいことも影響¹¹⁾すると言われており、学生は鏡視下手術において、看護師の指導により患者の状態を理解する難しさを感じていたと言える。鏡視下手術の件数は年々増加していることから、今後は実習対象として鏡視下手術を受ける患者の増加が予測される。学生が適時に必要な指導を受けられるよう、看護師の指導内容について今後検討する必要がある。また学生側の背景として、対象患者が決定するのが実習前日など直前であることも多く、対象患者の疾患や術式、看護の展開を十分に学習するには時間が不足している現状がある。また、個々の学生の実習対象患者の診療科が多岐にわたることや、実習施設が複数あることから、患者一人ひとりに合わせて事前学習を課すことが難しい。可能な限り鏡視下手術についての実習前の事前学習を充実させることや、看護師からの術前オリエンテーションで手術室を見学する機会を活用することで、実習に臨む準備状態を高める工夫が必要である。

教員の指導への評価が実習状況によって差がみられないことは、A大学の手術室実習の体制に関係があると考えられる。手術室実習は病棟における実習とは異なり、原則として教員は学生に同行することがなく、手術室で

行われる看護の実際を学べるように調整、指導するのは主に手術室看護師である。そのため、教員への評価には大きな影響を及ぼさなかったと推測される。

自由記述の内容からは、手術室看護師の役割に対する気付き、自身の手術室イメージの変化、多職種連携の重要性への気付き、清潔で安全な手術室環境保持の必要性の再認識などの思いが読み取れた。手術の実際を目の当たりにして学生が手術看護の意義を認識し、そのことが手術室看護に対する関心を生み出したと考える。手術看護を実際に見学して学ぶことは知的好奇心を育み、学習意欲の向上に繋がることが示唆された。

2. 手術室実習満足度に影響する要因の検討

今回の研究では、学生の手術室実習に対する満足度は概ね高く、その満足度は学びの深まり、教員の指導、手術中の看護師の指導と有意な相関が認められた。さらに満足度に影響を与える要因として、手術中に看護実践経験があった者に対しては手術中の看護師の指導および学びの深まりが強く影響していることが明らかになった。学生は出血量の測定、尿量測定、体位固定の介助等を多く経験しており、それらの援助を経験する際に看護師から具体的な指導を受けられたことが、高い満足度に結びついたと推測できる。手術終了まで見学した学生においては手術中の看護師の指導および教員の指導が、切開手術群については学びの深まりおよび教員の指導が影響していることが明らかになった。このことより、教員、看護師双方が各々の指導的役割を果たすことの重要性が示唆された。教員の関わりとして、手術前に実習に必要な学習内容の提示や記録指導を行っていること、加えて手術後に実習の振り返りを通して学生の理解状況を確認する機会を意図的に設けていることは有効であったと言える。看護師は、学生が実習記録に挙げた学習目標を共有し、それが達成できるように意識して見学の機会を設ける

ことや、学生が考えた患者の問題点について看護師とともに観察するなど、主体的に実習を受けられるように支援することが、学生の学びを深め、実習満足度を高めると考えられる。

なお、本研究においては、受け持ち患者か否かによって手術室実習満足度や学びの深まりには関連は認められなかった。手術室実習に対する満足感について、滝は受け持ち患者の手術を見学した学生と受け持ち以外の患者であった学生の満足度に差が無かった¹²⁾ことを報告している。一方、小澤らは手術室実習の対象患者は受け持ち患者のほうが満足度が高いこと、背景として術前から患者と関わることで患者の疾患や手術への思いを理解しようとする¹³⁾が関係すると述べている。本研究においては実習対象が受け持ち患者かどうかではなく、術式などの実習状況や教員および看護師の指導が、より実習満足度に影響する要因となっていた。

今回の調査では、手術室実習で困ったことがあったとする学生が半数近く存在した。主な内容は手術前には事前学習の内容、手術中には自分の立ち位置や動き方や手術見学が最後までできなかったこと、手術後には患者の観察や看護計画立案についてであった。学生が学習内容や看護計画・観察を困ったこととして挙げるのは、手術を境に患者の身体的、心理的状态が一変する¹⁴⁾ために患者の状態に合わせた適時の学習が困難であることが背景にある。手術室看護師が学生の目の前で起きている手術の進行状況や看護師の役割、各職種の業務内容と連携などを随時伝えることで手術室実習における学習経験を意図的に言語化¹⁵⁾することにより、学びを深めることができる。手術中の立ち位置を困りごとと感じる学生に対しては、手術前のオリエンテーションで手術場面を想定した具体的な指導が行われることで解消が期待できる。また、手術終了まで見学できない学生の中には、体調

不良のために見学を途中で断念した者も含まれる。手術室という未知の環境に足を踏み入れることへの不安と緊張⁴⁾や、手術室で長時間の立ち通しであることは体調不良に陥るリスクを高める。教員と看護師は、より良い状態で実習に臨めるよう、手術室実習に対する不安の軽減、体調管理などに取り組む必要がある。実習満足度を高めるためには、学生の困りごとにも着目して術前から術後を通して適時に指導を行うとともに、教員と看護師が協力し、継続して学生を支援することが重要である。

周手術期看護を学ぶ学生にとって、手術室実習は学びを深めるための貴重な学習の場である。手術室で実際に手術による侵襲を目の当たりにすることが、患者に及ぼす身体的・心理的影響とその後の回復過程への援助について考える最大の機会となる。周手術期看護学実習の指導においては、患者の術前から手術、術後に至る一連の過程を継続して学べるよう、学習を支援することが学生の手術室実習満足度の向上に寄与すると考える。

3. 研究の限界と今後の課題

手術室実習の背景は実習内容、指導状況など様々であり、また個々の学生の実習への準備状態や興味の度合いは異なることから、本研究の結果によって手術室実習全般を普遍化するには限界がある。また、満足度を高める要因について明らかにしてきたが、手術室内で具体的に何を見学し何を学ぶことが満足度への影響要因となるのかや、手術室実習の経験による術後の看護実践への影響は明らかにしていない。しかし周手術期看護は手術終了とともに終結するのではなく、術後、回復期、退院後までを予測し、看護介入することが求められる。今後は手術室実習での学びの状況、理解度等に焦点をあて、より詳細な調査を行う必要がある。さらに、周手術期看護教育の一部である手術室実習を学習の契機として、術後の看護実践に活かすための手術室実習の

より良いありかたについては検討を重ねていく余地がある。

V 結論

看護学生の手術室実習における実習満足度とその影響要因を、学習状況および指導との関連に着目して調査した結果、以下のことが明らかになった。

1. 手術室実習への評価は、実習状況別にみると手術終了まで見学した学生の興味において有意な差が認められ、また手術中の看護師の指導への評価は切開手術群のほうが有意に高かった。
2. 学生の手術室実習に対する満足度は学びの深まり、教員の指導、手術中の看護師の指導と有意な相関が認められた。実習満足度に影響を与える要因として、手術中に看護実践経験をした学生においては手術中の看護師の指導および学びの深まりが影響していた。手術終了まで見学した学生には教員の指導および手術中の看護師の指導が、切開手術群については学びの深まりおよび教員の指導が影響していることが明らかになった。
3. 手術室実習の満足度を高めるためには、手術室看護師と教員による継続的な周手術期看護教育が求められる。手術前の事前学習の工夫、オリエンテーションの活用により手術室実習の準備状態を高めることが重要である。手術中は看護師が手術の進行状況や看護師の役割、各職種の業務内容と連携などを随時伝えることや、看護の実践経験により学生の理解を深めることが満足度の向上につながる。

謝辞

本研究の実施にあたりご協力頂いた看護学生の皆様に深謝いたします。

付記

本研究の一部は第42回日本看護研究学会学術集会にて発表した。

引用文献

- 1) 厚生労働省.看護教育の内容と方法に関する検討会報告書.1-15.
<<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbiu.pdf>>.2016年11月20日.
- 2) 澤田石真恵,東由紀子.手術室における臨床実習の実態調査-学びのレポートの内容分析,指導内容・方法の検討-.日本手術看護学会誌.2012;8(1):36-39
- 3) 深澤佳代子.手術医学教育と研究の方向性 看護基礎教育における手術室看護の位置づけと教授方法について 手術室実習について.日本手術医学会誌.2006;27(4):296-298.
- 4) 砂賀道子,石田順子,石田康子,星野泰栄.成人看護学実習 I における手術室見学の实態と教育的サポートに関する研究.高崎健康福祉大学紀要.2012;11:111-121.
- 5) 小西美和子,小関真紀,森一恵,吉田智美,田中京子,高見沢恵美子,他.周手術期看護実習に携わる看護師が学生に求める学習内容と看護基礎教育への期待.大阪府立大学看護学部紀要.2007;13(1):9-17.
- 6) 水谷郷美,城丸瑞恵.国内文献からみた手術看護教育における研究動向 看護基礎教育に焦点を当てて.日本手術看護学会誌.2015;11(2):278-284.
- 7) 直成洋子,前田和子,橋本歩美,原島利恵,山岸千恵,豊田真弓,他.成人看護学実習の学生による評価 授業過程評価スケール(看護学実習用)を用いて.茨城キリスト教大学看護学部紀要.2013;4(1):35-45.
- 8) 辻村弘美,中村美香,桐山勝枝,柳奈津子,金井好子,佐藤未和,他.基礎看護学実習における学生実習満足度と学生指導体制に関する考察 2011・2012年度と2013・2014年度を比較して.群馬保健学紀要.2016;36:21-29.
- 9) 水谷郷美,城丸瑞恵.手術室実習における学生・実習指導看護師の達成感に関連する要因.日本手術看護学会誌.2011;7(1)10-14.
- 10) 松山晶子,恵藤昌子,八木美枝子.腹腔鏡手術における看護教育方法を考える モニター映像について直接介助看護師の理解の実態調査.日本手術医学会誌.2009;30(4):318-322.
- 11) 原田美枝子,中谷章子.小児看護学における看護学生の満足度とその要因.湘南短期大学紀要.2013;24:61-66.
- 12) 滝麻衣,米村敬子,大坪奈保,小森あき奈,鬼丸美紀,藤卷承子,他.臨床看護学実習 I (急性期・周術期)における手術室見学実習の実態調査.聖マリア学院大学紀要.2015;6:67-70.
- 13) 小澤尚子,熊谷真衣,原島利恵.手術室実習に対する学生の満足感 実習形態による比較.日本手術看護学会誌.2013;9(1):50-52.
- 14) 石渡智恵美,菱刈美和子.周手術期・回復期看護実習の看護学生が感じた困難感における対処のプロセス.日本看護研究学会雑誌.2015;38(3):187.
- 15) 板東孝枝,雄西智恵美,今井芳枝,森恵子,市原多香子.手術患者を対象とした成人看護学実習における手術室での学生の学習経験.日本看護学教育学会誌.2012;22(2):13-25.